

テーマ論文

臨床心理学の歴史

—催眠を基軸として—

長谷川明弘

東洋英和女学院大学

東洋英和女学院大学

心理相談室紀要

Vol.18 2015, pp.56-66

臨床心理学の歴史

—催眠を基軸として—

長谷川 明弘

I. はじめに

本論は、催眠を基軸として起源から現代までに焦点を当てている。構成は大きく3部に分かれる。第1部は、原始治療から精神分析的心理学までである。第2部は、ドイツでの心理学の成立からアメリカでの臨床心理学 (Clinical Psychology) の創始期、そして行動科学との関連に注目している。第3部は、日本における心理学に関する専門職の国家資格の歴史について述べる。本論では、催眠を基軸として心理学や臨床心理学の歴史を振り返る中で、臨床心理学が実践だけでなく科学に重きをおいて、社会の情勢に気を配りつつ、社会の中で認められて展開してきた点を強調したい。

II. 原始治療から精神分析的心理学まで

黎明期

臨床心理学の起源は、宗教、医療、哲学との区別が出来ないくらい古い。その起源は、世界各地の民族が有していたであろう呪術、儀式、祭典にまで遡り、原始治療 (primitive healing) と呼ばれている。時代が下って記録が残されるものを挙げると中国医学の開祖とされ紀元前 26 世紀頃に実在したとされる黄帝が各種治療法の書物をまとめたと言われている「黄帝内経」の「素問」の移精變氣論篇に「古代は祈禱師による精神的暗示によって病気が治療できていた。ところが現代は、それだけでは治療が不十分となって他の治療法が必要なのはどうしてなのか」と言葉を用いた治療法について記述されている。なお現存する黄帝内経は、紀元前 2 世紀から紀元後 8 年頃に著された中国最古の医学書と言われている。他には紀元前 26 世紀頃のエジプトの

司祭であるイムホテプ (Imhotep) が始めたとされる治療法があげられる。イムホテプは「眠りの神殿 (temple sleep)」にて治療を希望する人が横たわって眠りにつくと、その人の夢の中で神から告げられた病気の知識や治療法について司祭が解釈できると考えていた。紀元前 4、5 世紀のギリシアでは、ギリシア神話に出てくるアスクレピオス (Asclepius) という医療の神を祭った神殿にて目を閉じている人の身体に神官が手を置き、ある呪文を唱えると病気が治るとする方法があったという。なおギリシア神話に登場する眠りの神であるヒプノス (Hypnos) は、催眠 (hypnosis) の語源となっている。

これらの治療法は、薬物といった物質を用いない心理学に基づいた介入法の起源として位置づけられる。このように、原始治療は心理学や医学よりもむしろ文化人類学や歴史的な記述を通して今日に伝えられている。心理学が学問として成立するのは 19 世紀後半になってからである。以下に心理学の歴史の中でも催眠を基軸にして臨床心理学に関連する事項を記す。

催眠の萌芽期

ヨーハン・ヨーゼフ・ガスナー (Johann Joseph Gassner : 1727 ~ 1779) はカトリック教会の神父として「悪魔払い」を行う活動の中で病人に対する祈禱や祓魔術を実行し、治療者としての名声を得ていった。ガスナーの評判を聞きつけて彼の治療を求める人がヨーロッパ各地から訪ねてきた。オーストリアの教会は祓魔術が、カトリック教会の職務の一つであるが典礼に厳格に従うべきことを強調してガスナーの活動を非難した。

メスメルによる動物磁気という物理的作用とみる仮説
フランツ・アントン・メスメル (Franz Anton Mesmer : 1734 ~ 1815) は、1766年に「人体疾患に及ぼす遊星の影響について」という卒業論文を書いてウィーン大学医学部を卒業した。メスメルは医師として仕事を始め、診察の中で当時注目されはじめた治療法を試すと患者が良くなっていった。メスメルは、その仕組みに「動物磁気 (animal magnetism)」が存在するためと考えた。1770年代に入ってメスメルは、次第に名声を得た。メスメルは1778年にフランス・パリに拠点を移した。既にメスメルの評判はパリでも響き渡っており診療所を訪ねる人々が増えていった。メスメルは、「動物磁気」の理論を科学界に認めてもらおうと努力してきたが全く理解してもらえなかった。一方で治療の評判が高まり同業者からの反感が強くなっていった。

メスメルの高い評判に対して1784年3月にフランス国王であるルイ16世は、科学学術委員会を設置し、動物磁気について検討した。米国駐仏大使となっていたベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin : 1706 ~ 1790) もその委員の一人であった。フランクリンは、靂を飛ばして雷が電気による自然現象であることを突き止めたことからヨーロッパでは電気の研究をする自然科学者として知られていた。

委員会による検証の結果、「動物磁気が物理的に存在する証拠が見当たらない」「治療効果が無いとは断定できないが想像によるものである」という結論が出た。メスメルは、社会的信用を失い、1785年に故郷に帰った後、ヨーロッパ各地を転々としたが1815年にドイツのメールスブルクで亡くなった。メスメルはラポールという言葉をも物理学から借用していたが、心理学的な信頼関係というよりも物理的に付加された現象として使用していた可能性がある。

ピュイセギュール侯爵

3人兄弟が揃ってメスメルから学び、その中の長子であったピュイセギュール侯爵 (Armand-Marie-

Jacques de Chastenet, Marquis of Puységur : 1751 ~ 1825) は、フランス貴族の中でも名門の家柄であるといわれている。ピュイセギュール侯爵は、メスメルに始まる磁気術を用いて人々に治療を行う中で、治療を目的とするには適しているが実験や大衆に公開する事を控えるべきであることに気づき、信頼関係 (ラポール) に基づいた心理療法として活用できる可能性を持ちうると考え始めた。ピュイセギュール侯爵は、衰退しつつあったメスメルが始めた「動物磁気」について1805年頃に再度脚光を浴びさせ、専門書を発表した。

ブレイドとエリオットソン

ジェームス・ブレイド (James Braid : 1795 ~ 1860) は、1841年にイギリス・マンチェスターで医師として勤務しており、大陸から伝わる「メスメリズム」に触れ、再実験を繰り返した。ブレイドは、脳生理学的に基づいた理論を打ち立て、neurohypnotismとtranceを同意語として用いた。1843年に出版された研究書の書名が神経的な睡眠の造語を意味して「Neurypnology」とし、その中でギリシアの眠りの神「ヒプノス (hypnos)」から催眠 (hypnosis) や催眠学 (hypnotism) という用語を使った。後で名称を修正しようとしたがhypnosisが普及してしまった。ブレイドは、光体を凝視させる「凝視法 (eye-fixation)」を好んで用いた。また催眠現象として活動性低下 (torpor)、カタレプシー (catalepsy)、無感覚 (anesthesia) を見出した。

ジョン・エリオットソン (John Elliotson : 1791 ~ 1868) は、ロンドンにある大学病院で外科医をしており、患者を動物睡眠の状態にした上で無痛手術を行った論文を1843年に報告した。

シュヴリエルの振り子

ミッシェル・シュヴリエル (Michel Eugène Chevreul : 1786 ~ 1889) は、フランスの化学者であり、マーガリンに含まれているマルガリン酸の発見や脂肪酸の研究で知られている。一方

で、1833年にシュヴリエルは、心霊術・降霊術 (spiritism) の中のこっくりさんや振り子を取り上げて施術者が意識しないでそれらの動きを操作していることを実験的に証明した。現在は、催眠現象の観念運動 (ideomotor) あるいは自動書字 (automatic writing) の一種として知られており、この現象に「シュヴリエルの振り子」という名前がつけられている。

サルペトリエール (Salpêtrière) 病院を拠点とした
シャルコーとジャネ

ジャン・マルタン・シャルコー (Jean Martin Charcot: 1825～1893) は1870年から1893年まで神経学を主な専門にしているなか、1878年から精神現象を研究対象に含めてヒステリーを対象とした催眠研究を始めた。1882年になるとフランスの科学アカデミーにおいて女性ヒステリー患者が3段階を経て催眠状態になることを朗読した (Ellenberger, 1970)。シャルコーは、ヒステリーが催眠と類似のものであるとし、体質的な素因を持った人に生じる神経症であると考えていた。シャルコーの内科学や病理医解剖学、老年医学そして神経病学への評価が高いが催眠学への貢献に関しては、精神疾患の一部の特徴を深く取り上げて単純化してしまったことによる弊害が指摘されている (Ellenberger, 1970)。シャルコーの人物評価が両極端に分かれていることから、その強いカリスマ性に対して、周囲からの進言が控えられた可能性が窺える。なお後述するフロイトは1885年から1886年にかけて4ヶ月サルペトリエールに滞在して催眠を学んだ。

ピエール・ジャネ (Pierre Janet: 1859～1947) は、シャルコーがいたサルペトリエール病院にて共同研究をしていたことで知られている (Ellenberger, 1970)。1885年にジャネは、遠隔催眠について研究の成果として発表したものの、その正確さに疑問を持っており、慎重な態度でいた。1890年以降はジャネはサルペトリエール病院で患者の診察をしながら臨床研究を進めていた。ジャネは、臨床観察に基づいた主に神経症に関する

理論研究を展開していった。ジャネが精神衰弱 (psychasthenia) という用語を考案し、神経症をヒステリーと精神衰弱の基本神経症に分類した。1893年にジャネは、シャルコーの考えを受け継いで、ヒステリーを心理的素因によって生じる心因性疾患であると再定義した論文を発表している。1889年にジャネは「心理自動症」を刊行した。その中でジャネは、催眠状態においてラポールに注目し、催眠状態が、特殊な知覚麻痺の中で催眠師を際立って知覚する様態 (選択的注意) であると考えていた。ジャネは、自動書字に加えて自動談話という技法を開発した。自動談話 (automatic speech) は自動書字が意識下の事柄を自動的に書き殴るように、意識下の事柄を声にして表現する方法である。ジャネは、ヒステリー患者の特徴の一つとみなす意識下にある固定観念を心理分析によって解明するだけ (意識的固定強迫観念にすだけ) ではなく、その固定観念を取り上げて解体や変形させて破壊する必要があると考えていた。ジャネは、催眠法をヒステリー患者に使用し続けたが催眠法と暗示は別のものと考えていた。ジャネは、催眠法をヒステリー患者の心的エネルギーのバランスを調節する手段の一つと捉えていた。ジャネは、容易に快復しそうな患者ほど実際は心の傷が深いということを指摘している。1902年にフランスの中でも最高の高等教育機関とされるコレージュ・ドゥ・フランスの実験心理学講座における教授の候補としてジャネと後述するアルフレッド・ピネが推挙されて、ジャネが任命され、活動の拠点を移した。1913年8月にロンドンで開催された国際医学会総会にてフロイトの精神分析に関するシンポジウムの機会が持たれた。ジャネは、神経症が心的外傷に起因することを示したのも、神経症を精神的に浄化させて治療するやり方も元来ジャネの着想であり、それをフロイトが盗んだと激しく批判した。Ellenberger (1970) は、ジャネが意識下 (subconscious) という言葉を作ったこと、フロイト、ユングやアドラーへの影響を初め、現代の力動精神医学へのジャ

ネの貢献が見落とされていることを指摘している。

アルフレッド・ピネ (Alfred Binet : 1857 ~ 1911) は初めての著書として1886年に「推論の心理学」を刊行し、その中で催眠を研究手法として用いていた。1891年までシャルコーに催眠を学んでいた。一方で、ジャネの研究の進展と拮抗状態にあり、その後、ジャネに先を越されたと判断したのか、催眠やヒステリー、二重人格を取り上げなくなった。ピネは1905年に学童期の知能を測定する目的で「ピネ・シモン式知能検査」を開発した。

ナンシー (Nancy) を拠点としたリエボーとベルネイム

リエボー (Ambrose Auguste Liebeault : 1823 ~ 1904) はフランスのナンシー地方で活躍した医師であった。リエボーは、凝視法から催眠誘導を始め、眠りが強くなると暗示を与え、最後に必ずあなたの症状はなくなると保証するという催眠療法を用いていた。リエボーは、治療の報酬は患者が進んで払いたい額を請求し、時に受け取らないときもあったという。ベルネイム (Hippolyte Marie Bernheim : 1840 ~ 1919) は、腸チフスの研究や心疾患や肺疾患の研究で知られていた。1879年にナンシー大学医学部内科教授となった。1882年にベルネイムがリエボーの評判を聞きつけて、教えを請うことになった。ベルネイムがリエボーの業績を1884年に専門家向けに紹介した。催眠が誰にでも起こりえるが特殊な心理学的状態であり、暗示によって生じると主張した。ベルネイムは、催眠学の父と呼ばれ、催眠学や催眠ではなく暗示を重要視し、発表した書籍のタイトルは1884年「催眠状態及び覚醒状態における暗示について」や1886年「暗示とその治療への応用」とした。ベルネイムは、催眠状態を、一つの暗示を受け入れやすくすることを狙って提示した暗示の結果生じたことと考えていた。

ここでもフロイトは、1889年に2、3週間ナ

ンシーに滞在してベルネイムと時間を共にしている。

心理学会の開催と発展、ナンシー学派とサルペトリエール学派の催眠現象に関する論争

ベルネイムは1882年に心理研究会を創設した。1886年第1回国際心理学会の参加者は160人であった。1889年にパリで開催された第2回国際心理学会は210人、1892年にロンドンで開催された第3回国際心理学会で300人、1896年にミュンヘンで開催された第4回国際心理学会が503人であった (Ellenberger, 1970)。

1889年8月8日から12日までにパリで開催された実験催眠・治療催眠学国際会議には、300名以上の参加者がいた。リエボーやベルネイムだけでなくジャネ、下記に説明するプロイラー、フロイト、アメリカの心理学者であるジェームズやホールなどが参加した。論争となっていた催眠状態が暗示によって誰にでも起こりうる心理現象と認められ、ナンシー学派の考え方が正しいとされた。

ウィリアム・ジェームズ (William James : 1842 ~ 1910) は、医学、生物学、生物学等についてヨーロッパ大陸の研究の動向を足がかりにして、ハーバード大学に1875年に実験心理学の実験室を設立した。1890年に「The Principles of Psychology」を執筆した。米国の心理学の祖といわれている。ジェームズは、心理学者としてだけでなくプラグマティズムの哲学者としても知られている。

オイゲン・プロイラー (Eugen Bleuler ; 1857 ~ 1939) は、スイスの精神科医で1886年から12年間のライナウ病院での臨床経験に基づいて、統合失調症という精神疾患名を考え、その特徴を示し、1898年にブルクヘルツリ精神病院院長となり、1900年以降はユングがスタッフに加わっている。催眠を用いて精神的に浄化させて治療する方法は、1886年ジャネ、1893年プロイラー、1895年フロイトがそれぞれ実験した。

精神分析的心理学

フロイト、アドラー、ユング、新フロイト派の総称は、深層心理学 (depth psychology) や精神分析的心理学 (Psychoanalytic Psychology) と呼ぶ。精神分析と呼称する場合、フロイトの理論のみを指す。

ジグムント・フロイト (Sigmund Freud: 1856 ~ 1939) は、神経病理学の医師としての日々の実践の中から催眠研究に没頭していた。1885年から86年にかけてパリまで出てきてシャルコーの催眠を学んだ。1880年頃にウィーンの医師ヨーゼフ・ブロイエル (Joseph Breuer: 1842 ~ 1925) は科学者として知られており、ヒステリーの研究にも従事しており、その後フロイトとの共著で「ヒステリー研究」を1895年に著した。フロイトは1890年代半ばに催眠から離れた。催眠中に起きる「転移 (transference)」と呼ばれる強い感情が生じ、治療者に依存的になることが治療を妨げると考えた。フロイトは転移と依存を回避する方法を工夫し、自由連想法 (free association) を開発した。

アルフレッド・アドラー (Alfred Adler: 1870 ~ 1937) は、自らのモデルを個人心理学 (Individual Psychology) と呼んでいる。1900年頃にフロイトの「夢判断」の評判が医師の間で悪かった。アドラーがフロイトの理論を擁護した経緯があった。フロイトから彼の勉強会出席への誘いがアドラーに届き、1902年にアドラーはフロイトと初めて出会い、1911年まで親交を深めた。アドラーは、次第に独自の考えを展開していった。アドラーは、器官劣等性 (organ inferiority) を仮定し、生物学的な劣等感を補償 (compensation) するために、より強い完全になろうとする意志があると考えた。

カール・ユング (Carl Gustav Jung: 1875 ~ 1961) は自らのモデルを分析心理学 (Analytical Psychology) と呼んでいる。1907年にユングはフロイトと初めて出会い、1913年まで親交を深める。次第に独自の考えを展開していった。

タイプ論 (psychological types) とは、ユング

(1921) の性格理論のことで、類型論に分類される。連想実験 (Studies in Word Association) は、ユングが最初に連想実験を臨床的に用いようとした。言語刺激に対する連想を調べる中で言語によっては反応時間の遅延を認める。理由が知的なものではなく情動的な理由によって生じると考えて臨床場面で応用しようとした。元型 (archetype) は、集合的無意識から発せられる内容の中に存在する基本的な型のこと。人間が生まれながらに持っている表象の可能性のこと。代表的な元型として、ペルソナ (persona)、影 (shadow)、アニマ (anima)、アニムス (animus)、自己 (self)、太母 (great mother)、老賢者 (wise old man) と名付けられている。ユングの理論は、タイプ論や元型論に見られるように個々の概念が対立せず、相補性と全体性 (psychic totality) を重要視していることが大きな特徴である。

Ⅲ. 心理学や臨床心理学が学問の一分野として確立される

心理学の語源

心理学 (psychology) の語源を遡ると、ギリシア語の psyche と logos に分けられる。ギリシアでは心や魂を意味している言葉は、psyche であった。psyche は、元来、息や呼吸を意味していたようである。またギリシア神話では、愛の神であるクピド (Cupid) が愛した美少女であるプシュケ (Pchyché) としても描かれている。logos は、理論、概念、論理という意味であった。これらが組み合わさって psychology と呼ばれるようになった。

科学的思考を確立し学問を分類して「万学の祖」と呼ばれるアリストテレス (Aristoteles: c384-322 Bc.) は、『De Anima (心とは何か Peri Psyches)』の第1章の冒頭で、心に関する研究が学問の中でも最高位を与える理由に知識が厳密で、研究対象として価値があることを述べている。一方で、心の確信を何かの形で理解することが困難であり、その理由として研究方法が多岐にわたることを挙げている。

心理学の成立から臨床心理学の創始まで

1879年ヴィルヘルム・ヴント (Wilhelm Maximilian Wundt; 1832-1920) がドイツのライプチヒ大学にて心理学実験室を創設した。このことが心理学が他の学問から独立したと言われている。

1870年代にヴントの元で学んでいたエミール・クレペリン (Emil Kraepelin; 1856-1926) は、生育歴の聴取、神経学や脳解剖学、実験心理学などを精神医学に取り入れて、統合失調症と双極性障害の二大精神病を分類するなど精神疾患の分類と体系化をしたことから「近代精神医学の父」と呼ばれている。

1886年にヴントの元で「心理測定的究明 (Psychometric Investigation)」という題目によってアメリカ人として初めて心理学領域で学位を取得したキャッテル (James McKeen Cattell; 1860-1944) は、1889年にペンシルベニア大学の心理学教授に着任した。後に臨床心理学を謳うウィットマー (Lightner Witmer; 1867-1956) は、その頃、大学を卒業して歴史と英語をラグビーアカデミー (Rugby Academy) という男子学校で教えていた。その中で大学への進学を希望しているが聴き取りが苦手な十分な成績を得られない生徒が在籍していた。教師であるウィットマーが生徒を支援した結果、彼は苦手な聴き取りを克服して大学への進学を実現した。1889年にウィットマーは、ラグビーアカデミーで働きながら、ペンシルベニア大学大学院へ法律を学んで政治学を深めるため進学をした。これは、丁度、キャッテルが心理学教授としての着任したのと同時期である。ウィットマーは、キャッテルの講義を受講して心理学への興味を強め、実験心理学の分野にも参与すると決心した。ウィットマーはラグビーアカデミーを退職してキャッテルから指導を受ける学生となった。キャッテルとウィットマーは、個人差を取り上げて共同研究を行った。ウィットマーは、反応時間に関する個人差のデータを集める研究を進め、実験心理学の実験を運用するマニュアルを出版した。1891年にウィットマーはドイツに赴

いて、キャッテルが指導を受けたライプチヒ大学にいたヴントの元へと拠点を移した。1892年に異なった視覚形態の美学的価値等を題目として博士号をヴントの指導の下で得た。1892年にウィットマーはペンシルベニア大学へ戻り、ニューヨークにあるコロンビア大学へ転出したキャッテルと入れ違いで心理学研究室の主任になり、児童心理学を教えたり、知覚の個人差といった実験心理学の論文を発表したりした。

1896年にウィットマーは世界最初の心理学的クリニック (Psychological Clinic) をペンシルベニア大学に設置し、臨床心理学 (Clinical Psychology) という呼称を初めて使用した。ウィットマーは、特に言語障害や、不眠、問題行動や過活動や通学を拒絶された子どもたちを研究し、教師や保護者を支援する目的で大学外部に開かれたクリニックを設置したという。クリニックを訪れた子どもたちは心身両面を精査され、身体面の問題がないことの確認が行われた。

1907年に、ウィットマーは心理学的クリニック雑誌 (The Psychological Clinic) を創刊した。創刊号には、臨床心理学の説明と定義を示した。その中で臨床 (clinical) を医学の用語から転用し、臨床心理学が医学に加えて社会学や教育学と密接な関係にあることを述べている (Witmer, 1907)。さらにウィットマーは、実験心理学や生理心理学、児童心理学と同じくらいに臨床手法を講義して、学生を新しい専門職になるように訓練していることを表明している。

行動科学と催眠

イワン・パブロフ (Ivan Petrovich Pavlov; 1849-1936) は、レスポナント条件付けで著名である。パブロフは、催眠が大脳皮質の一部が活動を停止した部分的な睡眠であると「部分睡眠説」を提唱した。

クラーク・ハル (Clark Leonard Hull; 1884-1952) は、統制実験下の元で催眠実験を行い、催眠現象を科学的に解明しようとしたエール大学で実験チームを作り、『催眠と被暗示性

(Hypnosis and Suggestibility)』(1933) を出版した。催眠が権威暗示に対する被暗示性が非常に高くなった状態であって、覚醒状態と質的に異なった状態ではないと結論づけた (Pintar & Lynn, 2008)。ハルは、20 世紀における科学的な催眠を促進した功労者ともいえる。ハルの研究に触発されて後述するヒルガードやエリクソンが登場してくる。

アーネスト・ヒルガード (Ernest Ropiequet Hilgard 1904 ~ 2001) は、催眠研究や学習理論に関する研究に携わり、催眠と疼痛の研究をする中で、「隠れた観察者 (hidden observer)」という概念を提唱した (Hilgard, 1977, 1986)。ヒルガードは、スタンフォード催眠感受性尺度 (Stanford Hypnotic Susceptibility Scale) を共同で開発し、これは科学的な催眠研究の道具として世界的に活用されている。ヒルガードは、「Introduction to Psychology」を 1953 年に執筆し、現在も編者を変えて「ヒルガードの心理学 (Atkinson and Hilgard's Introduction to Psychology)」として版を重ねている心理学の教科書の執筆者としても知られている。

ハンス・アイゼンク (Hans Jurgen Eysenck : 1916-1997) は、被暗示性と知能との関連を検討するなど、科学的手法を用いた研究を行った。ジョセフ・ウォルピ (Joseph Wolpe : 1915-1997) が系統的脱感作法 (systematic desensitization) の中に催眠手法を取り入れた (Wolpe, 1958, 1969)。

シュルツによる自律訓練法の体系化

1890 年頃、ドイツの脳生理学者オスカー・フォクトが臨床催眠法を適用した中から効果的に面接が進んだ人の報告を集約した 1932 年にドイツ人のシュルツ (Johannes Heinrich Schultz : 1884 ~ 1970) が催眠状態にみられた体の状態を系統立てて練習するよう体系化して自律訓練法 (autogenic training) を完成させた (成瀬・シュルツ, 1963)。現在、自律訓練法は、心身医学・心療内科領域で多く使用され、自己催眠とは別のメカニズムであるという見解が普及している。

科学的な心理療法の実践を追求

カール・ロジャーズ (Carl Ransom Rogers : 1902-1987) は、当時設立されたばかりの児童相談所で実践活動を行った後、大学で教鞭を執りながら実践を続けた。当時主流であった指示的療法とは正反対のやり方を提唱し、人間中心療法 (Person Centered Approach) と呼ぶようになった。エンカウンターグループ (Encounter group) の実践を行い、国際紛争の解決を試みようとした。ノーベル平和賞の候補とまで目されたが、候補者が発表される前に逝去した。ロジャーズは、心理療法では主観を重視する一方、研究では客観的でいようと科学的な手法を取り入れた。面接の音声記録を文字情報にして初めて公開した。

卓越した科学研究と臨床実践から心理療法への貢献

ミルトン・エリクソン (Milton Hyland Erickson ; 1901-1980) は、ハルの講演を学生時代に聴いて催眠に興味をもち、ハルの定型的な催眠誘導がその人個人の個性を無視したものだという考えを持った。エリクソンは、抵抗を回避する方法を工夫するなかで、利用アプローチ (Utilization Approach) や自然アプローチ (Naturalistic Approach) という概念を提唱し、その人個人に合わせた独特な催眠誘導法を確立した。エリクソンの臨床実践が影響を与えた心理療法は、ブリーフセラピー (Brief Therapy) である。一方で科学的な手法で催眠を研究し、時間歪曲 (time distortion) といった催眠現象を発見するなど精神的に研究論文や事例論文を発表した。エリクソンの面接の様子はビデオにて映像と音声記録が多数残されている。エリクソンを取り上げた研修会では、そのビデオを提示しての解説を交えた研修を受けることがある。ビデオからは、エリクソンが自らを徹底的に訓練した上での臨床実践が成り立っていることが窺える。

催眠に基づいた効果的な会話から心理療法への貢献

ミルトン・エリクソンに長年師事し、ブリーフセラピーや家族療法を創始した一人である

ジェイ・ヘイリー (Jay Douglas Haley : 1923 ~ 2007) は、エリクソンの臨床実践を取り上げ、家族発達段階とする枠組みを提示した『アンコモンセラピー (Uncommon Therapy)』の中で会話によるトランス誘導 (自然的な催眠手続き) を強調することで人と人との間のある特殊なコミュニケーションの型と催眠を再定義した (Haley, 1973)。催眠をコミュニケーションという立場から取り上げることは心理療法への応用性の広さと日常場面での効果的なコミュニケーションとしての適用の可能性が生まれる。

ミラクル・クエスチョン：催眠からブリーフセラピーへ
スティーブ・ディ・シェザー (Steve de Shazer ; 1940-2005) は、エリクソンが 1954 年に発表した「水晶玉技法 (Erickson, 1954)」に注目した。ディ・シェザーは、トランスがない状態で同じ成果が得られるように面接法を工夫する中で解決志向ブリーフセラピーの中で用いられるミラクルクエスチョンを発案した (de Shazer, 1985)。「この問題が解決したら、あなたや他の人にとって、物事はどんな風になっているでしょうか」とクライアントに訊ねる技法の根底には、問題を探るのではなく、解決を元にした治療の基盤を援助者が相談者と共に探りながら形成することにある

IV. 日本の臨床心理学のはじまり

千里眼事件と福来友吉：信じることとわかることの
区別

日本国内に目を向けると元良勇次郎 (もとらゆうじろう : 1858 ~ 1912) は 1888 年 (明治 21 年) に東京帝国大学の哲学科心理学講座初代心理教授となったが 1912 年に 54 歳で急逝した。元良の元で指導を受けた福来友吉 (ふくらいともきち : 1869 ~ 1952) は、催眠研究で東京帝国大学から博士号を授与され、その後「催眠心理学」(福来, 1906) を発表するなど科学的な研究を指向していた。福来の研究領域は、現在でいうところの異常心理学であり、将来は臨床心

理学領域での活躍が期待されていたと考えられる。

当時のマスコミに各地で超能力者の報道があり、その要請に応じて福来は透視や念写の研究を行った (「千里眼」の研究)。福来は、検証の結果、その存在について肯定的な発言をした。他の領域や他の大学の専門家を交えて検証実験が繰り返行われた。研究協力者の自殺や早世など研究体制が崩れた。検証実験では、再現性が確認されなかった。その後、福来は東京帝国大学助教授の職を追われた (寺沢, 2004)。東京大学が臨床心理学よりもむしろ実験心理学に重きをおくようになった背景はこの「千里眼事件」があるからだと考えられる。その根拠として、文部省 (現在の文部科学省) が認可した心理教育相談室の開設された時期は、1980 年に京都大学、1981 年に九州大学、1982 年に東京大学となっている。それ故、九州大学や京都大学が東京大学に比べて積極的に取り組もうとしていたのではないかと推測する。

日本における催眠研究：福来友吉以降の臨床心理学
の展開

小熊虎之助 (おぐまとらのすけ : 1888 ~ 1978) は、明治大学や日本女子大学で教鞭を執っていた。萌芽期の海外の心理学者の研究を紹介し、また海外の批判的 (非信者的) 超心理学の紹介や実践に当たったり、催眠の研究をしていた。小保内虎夫 (おぼないとらお : 1899 ~ 1968) は、東京教育大学で教鞭を執っていた。色彩研究など実験を行った。

成瀬悟策 (なるせごさく : 1924 ~) は、小保内虎夫から指導を受け視知覚の実験を行っていた成瀬は、月曜研究会を立ち上げ、最大 9 名の同志と共に催眠研究をはじめ、1956 年 10 月に催眠研究会が設立された。この研究会が 1963 年 11 月に日本催眠医学心理学会となった。成瀬は、催眠研究を通じて知り合ったミルトン・エリクソンとの親交が深かった。成瀬は、九州大学で教鞭を執り、1960 年代から臨床動作法 (成瀬,

1995)を体系化する。また成瀬が1951年頃に夜尿症の事例報告を行い、それが日本の臨床心理学の事例報告の第1号であり(成瀬, 2014)、また成瀬は臨床心理士認定番号が1番目であるという。

河合隼雄(かわいはやお:1928~2007)は、大学で数学を専攻したあと数学担当の教員として高校に勤務しながら、ロールシャッハテストに興味を持って学んでいた。ブルーノ・クロッパ(Bruno Klopfer:1900~1971)によるロールシャッハテストの書籍への疑問点を問い合わせることをきっかけにして1959年に米国へ留学した。その後さらにスイスにあるユング研究所への留学を経て1965年にユング派分析家資格を日本人第1号として取得して、箱庭療法(Sandplay Therapy)の紹介と共に帰国した。京都大学にて教鞭を執った後、文化庁長官を務めた。河合(1976)は事例研究の重要性を指摘し、今日の専門職養成に組み込まれている。

佐治守夫(さじもりお:1924~1996)は、国立精神衛生研究所厚生技官として勤務し、スタンフォード大学での留学の後、東京大学にて教鞭を執った。ロジャーズが提唱したクライアント中心療法の実践と普及に努めた(佐治, 1997)。

成瀬、河合、佐治がそれぞれ九州大学、京都大学、東京大学で後進の指導に当たり、1960年代以降の日本の臨床心理学を牽引した(河合・佐治・成瀬, 1977)。

日本における心理職の国家資格化に向けた歴史

1962年に日本心理学会を中心とした19団体によって「心理技術者資格認定企画設立準備会」が立ち上げられた。1964年に資格問題を取り上げる学術団体として日本臨床心理学会が発足した。1967年に「心理技術者資格認定委員会」が発足した。しかし1969年に大学紛争の影響を受けるだけでなく組織内外の反発によって臨床心理学会が分裂して心理職の国家資格に関する検討が中断となった(日本臨床心理学会, 1988)。

1982年に、臨床心理学会から心理職の国家資格構想を持った理事が独立して心理臨床学会を創設した(初代理事長:成瀬悟策)。1988年心理臨床学会を中心とした関連12団体の協賛で「日本臨床心理士資格認定協会」が設立された。1989年に「臨床心理士会」が発足した(初代会長:河合隼雄)。1990年代になって「臨床心理士」を大学院で養成するということが主流となり養成大学院「指定校制度」へ移行していった(丸山, 2009)。

2004年に全国保健・医療・福祉心理機能協会(全心協)を中心とした「医療心理師国家資格制度推進協議会」が発足した。2005年になって「医療心理師(仮称)国家資格法を実現する議員の会」がもたれた。これに応える形で2005年に臨床心理士側から「臨床心理職国家資格推進連絡協議会」が発足し、「臨床心理職の国家資格化を通じ国民のこころのケアの充実を目指す議員懇談会」が組織された。2005年7月に文部科学省と厚生労働省を交えた協議を経た上で「臨床心理士及び医療心理師法案」提出に関する合意がまとまるが提出されないまま凍結となった。この背景には、自民党と厚生労働部会の了承が得られなかったという説がある(医師側との折り合いがつかなかった)。

2000年前後から臨床心理士養成大学院指定校制に対して心理臨床学会以外の多くの心理学会(日本心理学会など)からの反発が生じていた。2005年前後からそれらをとりまとめていた心理学諸学会連合(諸学会連合)が、心理職の国家資格化に向けての積極的な活動をするようになった。また臨床心理士に関連する組織は、臨床心理職国家資格推進連絡協議会(推進連)を設け、医療心理師を推進していた組織は、医療心理師国家資格制度推進協議会(医療協議会)を設けた。2009年以降に3団体(推進連:22団体、医療協議会:25団体、諸学会連合:45団体)が心理職の国家資格に関する調整の中心となった。2012年3月に国会議事堂の一室で心理職の国家資格化を目指す院内集會がもたれ、6月と8

月に自民党と民主党にそれぞれ「心理職の国家資格化を推進する議員連盟」が立ち上がった。

2013年4月1日に一般財団法人日本心理研修センターが設立され、9月に試験・登録機関に指定される要望書が関連団体に送付された。2013年9月に精神科七者懇談会より『心理職の国家資格化に関する提言』が出され、10月に関係各方面に発送された。

2013年11月13日に自民党「心理職の国家資格化を推進する議員連盟」第3回総会にて臨床心理士資格認定協会がヒアリングされた。2014年4月22日に自民党「心理職の国家資格化を推進する議員連盟」第4回総会があり、公認心理師法案要綱骨子(案)を承認した。2014年4月23日に厚生労働部において、心理職の国家資格化の法案についてヒアリング(自民党議連及び臨床心理士会から)が持たれた。

2014年6月16日に「公認心理師法案」の国会提出(衆議院)が行われた。2014年11月12日に「公認心理師法案」を通すことについて各党から了承が得られた。しかし2014年11月21日に衆議院解散により「公認心理師法案」は審議未了のまま廃案となった。

2014年11月末から12月末:三団体会議。日本精神神経学会、日本心理臨床学会、精神科七者懇談会などの各団体から再提出の要望や無修正成立の要望が出される

2015年2月現在:「公認心理師法案」の国会への再提出が待たれている。

V. おわりに

黎明期から最近までの臨床心理学の歴史を振り返った。その中で臨床心理学は、心理学者の専門活動が社会に対する説明責任を問われるようになった時代背景から発展してきたことが読み取れる。また催眠は、臨床心理学の中の心理療法だけでなく、心理学が哲学から独立し科学の条件を満たしていく上で、大きな存在を有してきたことが示された。心理学や臨床心理学の専門家は催眠法について正しい知識と技能の習

得が望ましい。催眠法を習得することにより、この領域の新たな研究の展開や臨床実践が可能となることが見込まれる。

本論では紹介しきれなかったが米国や英国など主要な国々では心理学の専門職が国家資格として位置づけられている。日本では、50年以上にわたって国家資格化が望まれている状況である。この歴史に書き加える事態の到来を期待したい。

VI. 文献

- アリストテレス 桑子敏雄 訳 (1999) 心とは何か 講談社学術文庫. 〈Aristoteles De Anima (Peri Psyches)〉
- ボールズ・R・C 心理学物語—テーマの歴史—富田達彦 訳 (2004) 北大路書房. 〈Booles R. C. 1993 The Story of Psychology : A thematic History, Thomson Learning Company〉
- エレンベルガー, H. F. 無意識の発見 力動精神医学発達史 木村敏・中井久夫監訳 (1980) 弘文堂. 〈Ellenberger H. F. 1970 The Discovery of The Unconscious; The History and Evolution of Dynamic Psychiatry. Basic Books〉
- Erickson MH. 1954 Pseudo-Orientation in Time as a Hypnotic Procedure, *Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 2, 261-283.
- 福来友吉 1906 催眠心理学 成美堂書店
- フロイト, S. フロイト著作集 (懸田克躬・高橋義孝・小此木啓吾・井村恒郎・生松敬三 訳) 人文書院
- ヘイリー, J. 1973 高石昇・宮田敬一監訳 (2001) アンコモンセラピー—ミルトン・エリクソンの開いた世界 二瓶社. 〈Haley J. 1973 Uncommon Therapy : The Psychiatric Techniques of Milton H. Erickson, M. D, W. W. Norton & Company ; Reissue edition〉
- Hilgard E.R. 1977, 1986 分割された意識—〈隠れた観察者〉と新解離説—児玉憲典 訳 (2013) 金剛出版. 〈Hilgard E.R. 1977, 1986. Divided consciousness: multiple controls in human thought and action Expanded Edition. Wiley〉

- ユング・C・G 1921 タイプ論 林道義 訳 (1987) みすず書房.
 〈Jung, C. G. 1921, 1950, 1967 PSYCHOLOGISCHE
 TYPEN, Zurich, Rascher Verlag〉
- 河合隼雄 1976 事例研究の意義と問題点—臨床心理
 学の立場から—, 臨床心理事例研究 (京都大学教
 育学部心理教育相談室), 3, pp. 9-12.
- 河合隼雄・佐治守夫・成瀬悟策 1977 鼎談「臨床心理
 学におけるケース研究」臨床心理ケース研究, 1,
 pp. 232-254, 誠信書房.
- 日本臨床心理学会 1988 日臨心の文書等 臨床心理
 学研究, 25 (3), pp. 4-54.
- 丸山和昭 2009 臨床心理士—学術団体による養成体
 制の構築 橋本鉦市 (編著) 専門職養成の日本的
 構造, 玉川大学出版部, pp. 184-203.
- 成瀬悟策・シュルツ, J. H. 1963 自己催眠, 誠信書房
- 成瀬悟策 1995 臨床動作学基礎 学苑社
- 成瀬悟策 2014 動作療法の展開 誠信書房
- Pintar, J. and Lynn, S. J. 2008 Hypnosis : A Brief Hystory.
 Wiley-Blackwell.
- ライスマン・J・M 1976 臨床心理学の歴史 茨木俊夫
 訳 (1982) 誠信書房. 〈Reisman J. M. 1976 A History
 of Clinical Psychology New York : Irvington〉
- 佐治守夫 1997 心理療法面接論講義—日精研心理臨床
 センター (編) 日本・精神技術研究所
- ド・シェーザー 1985 短期療法 解決の鍵 小野直広
 訳 (1994) 誠信書房. 〈de Shazer, S. 1985 Keys to
 Solution in Brief Therapy. New York, NY : W W
 Norton & Company.〉
- 寺沢龍 2004 透視も念写も事実である—福来友吉と
 千里眼事件—草思社
- Witmer L. 1907 Clinical Psychology, 1 (1) , pp. 1-9, The
 Psychological Clinic
- Wolpe, J 1958 逆制止による心理療法 金久卓也 訳
 (1977) 誠信書房. 〈Wolpe, J. 1958 Psychotherapy
 by Reciprocal Inhibition. California : Stanford
 University Press〉
- Wolpe, J 1969 神経症の行動療法 新版 行動療法の
 実際 内山喜久雄 (監訳) (1971) 黎明書房 .
 〈Wolpe, J. 1969 The Practice of Behavior Therapy.
 Pergamon Press〉